

ディレクター日誌（活動・子どもたちの様子）

期 日：平成29年8月16日（水）～24日（木）【8泊9日】

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家周辺の山域（山口市阿東）

参加者：県内の中学生・高校生（男子17名、女子6名）

1日目「開会行事・ダッフルシャッフル（荷物の詰め替え）・バックパッキング（荷物を背負っての移動）」

期 日：平成29年8月16日（水）

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家～飯ヶ岳登山口 泊

テーマ：出会いの日（ふれあい体験）

【活動の様子】

8月16日、十種ヶ峰周辺には山間部特有の雲がかかり、雨が激しく降り続ける中、10時半の開会式に向けて緊張した面持ちで徐々に子どもたちが集まってくる。今年から1班増えて、3班体制。総勢22名（体調不良の一人は体調回復次第参加）が十種ヶ峰青少年自然の家の体育館に集った。

いよいよプログラムのスタート。開会式で、「楽しさ」についてメッセージを伝えた。楽しいことはいつでも楽なこととは限らない。辛いこと、苦しいことを乗り越えて味わえる本当の楽しさを感じられる9日間にしてほしい。「大変」という字は「大きく変わる」と書く。コース中「大変だ」と感じることも自分が大きく変わるチャンスと捉えて、仲間とともに楽しむ気持ちを大事にしてほしいとエールを送った。

開会式が終わると、各班で行程に必要な荷物を大きなザックに詰めていくダッフルシャッフルを行う。山の中で安全に生活するために、何をどんな順番で詰め込んでいくのか、説明を聞きながら時間をかけて丁寧に初めてのパッキングを進めていった。自分の着替えや寝袋などの個人装備に加え、テントやタープ、料理道具や食材などの共同装備等、全ての荷物を入れると10～20kgにもなる。13時の出発に向けて、各班テキパキとパッキングを進め、昼食（十種ヶ峰むすび）を食べているうちに、緊張感とともに、「よし、やるぞ！」という顔つきも見られるようになってきた。



いよいよ移動。コースのスタート地点となる飯ヶ岳の登山口まで車で移動する。移動中、段々と民家が見えなくなり、山が深くなっていくと、「どこまで行くんだろう？」という不安を抱いた子もいたようだった。初日は飯ヶ岳登山口に向かう林道の途中から、登山口の駐車場までの約1.5kmを歩く。靴ひもの結び方やスパッツ（足首等を保護するもの）の付け方、山での服装を確認したら、出発。移動中ずっと降り続いていた雨もやみ、天候も子どもたちのスタートを後押ししているかのようだった。30～40分程度の短い行程ではあるが、慣れない重さのザックを抱えているためか、静かに黙々と、しかし力強く目的地をめざして歩く様子が見られた。

女子班、男子1、2班ともに、順調にテン場（宿泊する場所）である登山口駐車場に到着し、テントやタープの設営に取りかかる。テントによって仕組みが違いため、とまどう場面も見られたが、無事本日の寝る場所が出来上がった。次に行うのは夕食の準備。メニューはマカロニシチュー。この食事を通して、初めて出会ったメンバーがだいぶ打ち解け、会話もずいぶん弾んだようだ。



山での生活は電気がないため、日の出とともに行動し、日の入り後できるだけ早く就寝できるように行動する。自然の中では、自然に逆らうことなく、できるだけ自然に合わせて生活することが基本となる。暗くなる前に夕食が済むように、インストラクターの指示を聞きながら、食事の準備を進めていた。最初のうちは、山での生活を身に付けるために、スタッフの指示や説明を聞くことが非常に大切である。基本をしっかり身に付けておくと、プログラ

ムが進むにつれてスタッフの手を離れ、自分たちの手で主体的に行動することができるようになっていく。

このプログラムは、4つのフェーズからなり、最初の約3日間は、「トレーニングフェーズ」と呼ばれる。ここでは、グループの機能、責任、協力のあり方、自然の中での生活の技術等の習得をめざす。野外での生活への身体的適応ができるようにする時期でもあり、インストラクターは、参加者に直接指導と指示的指導を行い、山を歩くためのスキルだけでなく、グループにおけるコミュニケーションの取り方など、必要なトレーニングをルートの途中で行うのである。

夕食後は各班でミーティング。キャンプに来た理由や目標等を班で共有し、次の日の予定を確認する。班によって5時～5時半起床、6時半～7時出発という目標を立て、就寝準備を始める。8時半頃にはテントに入って就寝となったが、初日の夜ということもあり、なかなか寝付けないうちも多かったようである。明日からは、いよいよ山歩きのスタート。各班、どんなドラマが待っているのか、楽しみである。

2日目 バックパッキング「飯ヶ岳ピークアタック（登山）」

期 日：平成29年8月17日（木）

場 所：飯ヶ岳登山口～飯ヶ岳ピークアタック～屋敷川林道奥 泊

テーマ：旅立ちの日（協力の体験）

【活動の様子】

2日目の朝を迎える。慣れない生活で、なかなか寝付けなかったようであるが、予定通りの5時に起床し、薄暗い中で行動を開始する。天気予報は、晴れ。最高気温は32度。初の山歩きには絶好の天気となった。いよいよ重い荷物を背負って山道を歩く時がやってきた。この日は、飯ヶ岳登山口から飯ヶ岳の山頂（937.1m）をめざし、宿泊地の屋敷川林道奥へ向かって行く予定である。

お互いのザックの重さを確かめ合うことで、自分だけでなく仲間のチャレンジも感じてからの出発となった。日常にはない重いザックを背負った上に、いきなりの急登が始まる。歩き始めに大切なのは、とにかくゆっくり歩くことである。普段の歩きよりも意識してゆっくり進むことで、山道に体が馴染んでくると、疲れにくく同じペースで歩き続けることができる。このような山歩きの基本をインストラクターに教わりながら、一步一步踏みしめるようにして、山頂を目指す。また、地図とコンパス（方位磁針）の使い方も教わりながら、歩いている道の向き、斜度、周りの地形などから、現在位置と進行方向を知るためのトレーニングを積んでいく。



天候に恵まれたおかげで、山頂では十種ヶ峰の山頂を遠くに臨むことができた。一週間

後のゴールとなる山を見据えられたことで、これからのチャレンジへの意識を高めることができたようである。夕方、雨に降られる場面もあったが、これも自然。カップを着たり、ザックカバーを付けたりと、山で雨に降られたときのトレーニングを行うこともできた。

女子班：5:00 起床→7:50 出発→10:40 飯ヶ岳山頂着→14:50 屋敷川奥テン場着

起床から朝の準備がとても早く、前日夜に確認していたとおりに行動することができた。しかし、出発前に複数の紛失物があり、予定より遅れての出発となった。声をかけ合いながら歩くという目標を意識して、進むことができたようである。夜のミーティングで、ブルーシートを敷くときなど、「誰か？」という問いに進んで動くことができなかったという課題について意見が出た。そこで、人任せにせず積極的に行動することを次の日の目標にした。



男子1班：5:00 起床→8:10 出発→11:20 飯ヶ岳山頂着→18:00 屋敷川奥テン場着

出発の時には、進んで重い荷物（共同装備）を持つ、チャレンジが見られた。荷物を背負っての山登りが辛く、足が止まるが多かったようである。さらに、下りでは急な坂道への恐怖心から、ゆっくり滑り降りるような感じで下山に時間がかかった。歩く中でメンバーの距離が開いてしまい、後ろを待って先頭が止まる場面が多かった。道のりの辛さと足の痛みからか「帰りたい」と訴える

メンバーもおり、翌日歩いた後でみんなで相談しようということになった。8人が一体感を感じながら歩くことが次の日の課題だと感じられた。

男子2班：5:00 起床→8:10 出発→10:55 飯ヶ岳山頂着→15:00 屋敷川奥テン場着

山頂からの下りで、急な坂道を下ることが難しく時間がかかってしまうメンバーがおり、また、それにしびれを切らして順番を抜かしてしまうメンバーもいた。急な下り坂で足下が滑り、お尻を付いて下方に滑り落ちてしまう事態が発生し、登山道に戻るまでに時間を要する場面があった。幸い怪我はなかったが、お互いに声をかけ合いながら歩いたり、休憩をきちんと取ったりするなど、安全第一で行動することの重要性を、夜のミーティングで再確認した。

3日目バックパッキング「弟見山ピークアタック（登山）」

期 日：平成29年8月18日（金）

場 所：屋敷川林道奥～弟見山ピークアタック～仏峠 泊

テーマ：発見の日（探求の意欲）

【活動の様子】

3日目の朝を迎えた。疲労がたまり朝の行動が辛くなってくる頃である。天気予報は晴れ。気温も高く、熱中症への警戒も必要である。この日の行程は、屋敷川の林道を奥までつめて稜線に抜け、弟見山の山頂を通過して、仏峠のテン場を目指す。道に迷う心配は少ないが、急登や急な下り坂もあり、前日よりかなり長い道のりとなるため、厳しい行程となることが予想された。

女子班：8:00 出発→12:10 弟見山山頂着→15:30 仏峠テン場着

朝、時間の意識が弱く、テントを出るのに20分かかった。出発も予定より1時間遅れた。登りは、ザックの重さとザックずれの痛み等で、重たい雰囲気での歩きとなった。しかし、山頂を越えてからの下りでは、辛い思いをしている子へ気遣いが見られ、全体としてよい雰囲気が生まれてきた。ミーティングでは、登りと下りの班の雰囲気の違いに触れ、お互



いに名前を呼ばれたら嬉しい気持ちになり、班の雰囲気向上が実感したという話が出てきた。

男子1班：8:40 出発→15:00 弟見山山頂着
→17:35 仏峠テマ場着

朝、歩き始めてすぐに、右足の痛みからメンバーの一人がストップした。今日1日の行程を考えたときに、イントラが安全に目的地まで行くことは難しいと判断し、本部スタッフが痛みを訴える子を病院へ連れて行くこととした。7人でのチャレンジとなったが、その中で荷物の重さに耐えられず進めなくなったり、慣れない山歩きと疲れで足下がふらついてしまったりする場面が見られた。荷物を持つのをスタッフが手伝う場面もあったが、7人で少しずつ着実に歩みを進め、暗くなる前にテマ場に辿り着くことができた。ミーティングでは、みんなでちょっとずつでも前に進むために、苦しいときや困ったときに相談し合うことを確認した。

男子2班：8:20 出発→12:30 弟見山山頂着→15:45 仏峠テマ場着

出発は予定より遅れたが、歩き始めてからは順調に進んでいった。「安全に歩く」という目標を意識して、危険箇所仲間をフォローする行動が見られるようになってきた。しかし、途中に取る休憩が小休憩ばかりで、ザックを下ろす大休憩を取る気配がなかったため、イントラが介入して大休憩を取る場面も見られた。ミーティングでは、本当はしんどかったのに、大休憩があってよかったという意見が聞かれ、安全面からも大休憩の重要性をみんなで共有できたようである。



4日目バックパッキング「三ツ頭(三ツヶ峰)ピークアタック(登山)」

期 日：平成29年8月19日(土)

場 所：仏峠～三ツ頭ピークアタック～桐ヶ峠～クォーツバレー(QV) 泊

テーマ：挑戦の日(困難の克服)

【活動の様子】

4日目は、3日間のトレーニング期間から子どもたちが主体的に動いていく期間に少しずつ移行していき、それまでにない様々な体験をする時期である。「エキスペディションフェーズ」と呼ばれ、グループ内には、強い信頼関係ができはじめる反面、衝突が発生しやすい時期でもある。インストラクターは行動の決定の多くを参加者に任せ始め、非指示的なさりげない支援を行う。インストラクターに教えてもらった山道の歩き方やテマ等の設営・撤収なども、徐々に自分たちの判断で行っていく。また、ファイナルツアー(最終章)に向けて、グループをつくっていく期間でもある。

今日は三ツ頭(989.4m)を目標の一つとしての活動開始となった。仏峠から桐ヶ峠までは、島根県との境界の稜線を歩くルートである。三ツ頭までの登りが難所であるが、その後も背丈ほどのクマザサ生い茂る中を進み、桐ヶ峠からの下りも危険箇所が多い。夜にはソロに入るため、できるだけ早



くテン場に着きたいが、かなりハードな行程である。

女子班：6:50 出発→9:34 三ツ頭山頂→13:00 桐ヶ峠→16:30 QVテン場着

時間に対する意識が高く、起きてからの朝食、パッキングなどお互いに声をかけ合って、スムーズに進めることができた。出発してからもかけ声をかけたり、注意すべき情報を伝言したりするなどして、いい雰囲気の中進むことができた。4日目ともなると疲労はピークに達しているが、気持ちのモチようで楽しく歩けるところが、このプログラムの奥深いところである。しかし、桐ヶ峠に辿り着く頃には、道のりの苦しさから涙をこぼす仲間も見られ、最後の下りは前後が大きく開いてしまったようである。



男子1班：8:40 出発→12:10 三ツ頭山頂
→16:20 桐ヶ峠→20:00 QVテン場着

朝から、どんな行動をするのにもみんなで動くという意識が芽生えてきた。昨日の様子を振り返って、一人は別行動、また一人は自分に合った荷物の量でというように、個々に合わせたチャレンジを選んだのスタートとなった。長い道のりの中で、何度も立ち止まり進めなくなりそうなこともあったようだが、定期的に行動食を口にしながらエネルギー

を補給し、一歩一歩歩みを進めていった。真っ暗な中、QVに辿り着いたときのメンバーの顔は、疲労の中にも「やりきった」という誇らしさが滲み出ているものだった。川で軽く顔などを拭いた後、ソロに入った。

男子2班：8:20 出発→11:30 三ツ頭山頂→14:00 桐ヶ峠→18:10 テン場着

出発は遅れたものの力強く歩みを進めていった。この日からイントラは列の後方に下がり、子どもたちがナビ（地図係）を先頭に進んでいった。道を間違えることなく、自分たちの力で稜線を進み、桐ヶ峠まで順調に辿り着いた。しかし、桐ヶ峠からの下りで歩みが遅くなる仲間が出てきたことで、早く進みたい人との間で険悪なムードになってしまったようである。テン場に着いた後、これまでの行程を振り返り、一緒にここまで過ごした仲間のことについてじっくり考えてほしいという願いを伝えて、ソロに入れた。

5日目ソロ「クォーツパレー（ステイ）」

期 日：平成29年8月20日（日）

場 所：ソロサイト～テン場（クォーツパレー） 泊

テーマ：思索の日（克己と反省）

【活動の様子】

ソロはそれまでの「動」に対して「静」のプログラムである。子どもたちにとって、疲れた体と心を休める時間であるとともに、「自分」や「他人」、「それまでの出来事」を見つめ、自分を振り返る貴重な時間である。子どもたちはここで、保護者の方からの手紙をイントラから受け取る。家族からの手紙を読んだりその手紙に返事を書いたり、これまでの自分を振り返って日記を書いたり各自が思い思いの時間の過ごし方をしていった。ソロに入ると夕方まで、話がしたくても1人で黙って過ごさなくてはならない。今年度から前日夜～翌夕方までと、夜をまたいで約24時間近い時間をソロで過ごすこととなった。ソロサイトで子どもたちが動くことができる範囲は、自分で設置したソロトップ（小さなタープ）下の半径約2mだけである。

ソロ明けは、お楽しみのフルーツパーティーとミーティングである。およそ丸1日誰ともしゃべらなかつた子どもたちは、堰を切ったように様々なことを話し始め、グループの

距離もぐっと縮まる。

女子班：16:00 ソロ明け

最後の下りで、遅れてしまう仲間に厳しい言葉をぶつけてしまい、まとまって歩けなかったことについてミーティングで話が出た。気持ちも体もいっぱいになることで、優しい言葉掛けができなくなってしまった。リーダーとして心配だったが、うまく声をかけられなかった。等、ソロに入って冷静になったからこそ気付いたことも多かったようである。みんなでもとまって歩けなくなったときに、「相手のことを考えながら自分の気持ちを伝える」ことを大切にしようという思いをみんなで共有した。

男子1班：15:00 ソロ明け

3日目から足の痛みを訴えて全員で歩けていなかったため、翌日の行程を変更し、ロード（道路）を歩いて目的地を目指すことをイントラが提案した。ファイナルの十種ヶ峰ピークアタックがみんなでも臨めるかは、まだわからないので、まずは明日、どれだけ時間がかかってもいいので、みんなでもゴールしたいという気持ちを共有し、目標を設定した。

男子2班：15:30 ソロ明け

前半の行程を振り返って、仲間に「ありがとう」の気持ちを伝え合うサクスという活動を行った。様々な「ありがとう」が出てくる中、スタッフが「歩くのは苦手でもその一生懸命な姿から勇気をもらったり、周りの仲間が何かできることはないかと手をさしのべようとするのでチームがまとまっていったりする、そんな役割を果たしてくれてありがとう」というような話をしたことで、考えさせられるメンバーが多かったようである。改めて「安全を自分たちでつくる」



ことを目標として確認し、そのために、焦らせるのはよくない、辛い人を元気づけよう、テンションを上げる声かけをしよう等の意見が話し合われた。中には、自分にとっては安全でも他の人にとっては危険というような、危険を危険と感じられないときはどうすればいいのかという疑問も率直にぶつけ合っていた。「安全」というテーマに対して、メンバーが一生懸命考え、悩んでいる姿が見られた。

ソロを挟み、プログラムの後半に向けて、各班で大事にしていきたいことを確かめることができたようである。翌日からは、いよいよグループがメンバーの力で歩みを進めていく段階に入っていく。

6日目バックパッキング「グループツアー」

期 日：平成29年8月21日（月）

場 所：クォーツバレー～白井トンネル～上宇津根奥 泊

テーマ：冒険の日（責任と信頼）

【活動の様子】

6日目は、ファイナルツアーを意識しての活動となる。ファイナル・エクスペディション・フェーズと呼ばれ、インストラクターの手を借りずに、グループだけで目的地をめざしてチャレンジする。生活や活動の全てを自分たちで話し合い、決定し、行動していくことになる。クループで困難を克服するため、それだけ大きな成功体験を味わうことができる。そして、仲間に対する信頼も揺るぎないものになる。インストラクターは、翌日の十種ヶ峰ピークアタックに向けて、安全に関する必要最低限のことだけ直接的な指示を行い、徐々に活動を子どもたちに任せていく。目を離さず、近過ぎず離れ過ぎず、子どもたちの

安全が把握できる適当な距離を保って、見守っていく。子供たちは、これまでインストラクターから教わってきたことをもとに、自分たちで協力し合って活動を展開していく。

女子班：6:46 出発→10:50 白井トンネル入口→12:45 稜線→16:40 上宇津根テン場着
朝の行動はいつものようにテキパキとしており、順調なスタートを切った。始めはロード（道路）を歩くということで、いつもより進むペースが速く、疲れの原因となってしまったようである。白井トンネルから山に入ったところで、頭痛を訴えたり、鼻血が出たりしたメンバーがいたことで、いったん立ち止まり、ペースを修正できていた。ここからは初めての踏み跡のない山歩き。コンパスワークが求められるが、ナビ任せにするのではなく、みんなでコンパスを振ってみんなで進行方向を確かめたことで、チームでまとまって歩けたという自信につながっていた。ミーティングでは、「思っても言えなかったことを口に出して言えた」、「遅れる人の気持ちがわかった」というように、これまでを踏まえて前向きに変わったことを認め合えた。一方で、「係にしばられている感じがある」、「まだどう思われるか怖いから言えないときがある」等の意見も出て、明日は「仲間を信じて思ったことを言おう」ということを目標に設定した。

男子1班：9:30 出発→12:45 丸山→13:45 上宇津根テン場着

昨晚から、8人みんなで歩く、そのためには何ができるかということと話していた。あの程度、決めるべきことを夜のうちに決めておいたので、いつもよりスムーズに朝の時間を過ごすことができたようである。しかし、細引きの紐、三脚2つ、スプーンなどの装備がなくなっていることがわかったので、じっくりと紛失物に向き合うことになった。ザックの中を全てひっくり返したり、テン場やソロサイト周辺を見回ったりして、三脚1つと細引きの紐は見つかったが、残りは見つからなかった。無くなった物は見つかっていないが、8人全員で歩くという目標を達成するためには、今日を逃すとチャンスがないかもしれないからチャレンジしたいという気持ちを本部に伝えての出発となった。予定より大幅に遅れた分、気合いの入ったスタートとなった。その後は順調にまとまって進み、丸山周辺の木陰で昼食、早いうちにテン場着となり、飯ヶ岳（2日目）以来8人そろってのゴールとなった。1つチームとしての目標を達成したことで、翌日の十種ヶ峰ピークアタックへの意欲が高まったようである。

男子2班：7:50 出発→11:05 白井トンネル入口→12:45 稜線→16:00 上宇津根テン場着

出発は予定より少し遅れたものの、スタート後のロードは1列でまとまって歩き、お互いに声かけをするなどして、いい雰囲気が進んでいった。白井トンネルからの山歩きで、少し単独行動が見られる場面もあったが、稜線に出る頃からまたみんなでまとまって歩くことができた。途中、ルート選択で迷い、少しいんトラが介入することもあったが、行程のほとんどをグループのメンバーの力で進んでいった。「安全」ということを意識しながら、いつも以上に声をかけ合い、みんなで楽しく歩けた1日となったようである。

7日目 ファイナルツアー「十種ヶ峰ピークアタック」

期 日：平成29年8月22日（火）

場 所：上宇津根奥～作業小屋～十種ヶ峰ピークアタック～方丈原 泊

テーマ：覚醒の日（実行力と協調性）

【活動の様子】

今日は、いよいよファイナルツアーである。グループの様子は、それぞれ特徴があり、目標もそれぞれ違っている。しかし、飯ヶ岳に登ったときから、はるか遠くに見えた十種ヶ峰は子どもたちにとって最大の目標であった。長い道のりを経て、ついにピークアタックの日。午後から少し心配はあるものの天候にも恵まれ、山頂では360°のパノラマが子どもたちを待っているはずである。これまでの集大成ともいえるグループチャレンジがス

スタートした。

女子班：6:37 出発→8:38 作業小屋→11:40 十種ヶ峰山頂着→14:30 方丈原テン場着

出発までの朝の行動はもうバッチリ身に付いている。テキパキ朝食、パッキングと済ませ予定通りに出発。始めの峠からピークまでの直登を力強く登り、稜線をズンズン進んでいく。あっという間に作業小屋到着。しかし、そこからの道を誤り、なんと福谷池方面に南下。後ろからイントラが心配そうに付いていくこと約30分。「コンパスが呼んでる」と進んでいる方向と地図上で向かう方角の違いに気付いたようだ。すぐに作業小屋まで引き返し、その後は順調にピークまで。360°の雄大なパノラマの中で昼食タイム。ゆっくりと山頂を満喫した後、下山開始。テン場となる方丈原に向かう。

ミーティングでは、途中、自分らしさについての話になった。この仲間だからこそ言える本音、ありのままの自分らしさは、日常に戻って出せるかということと難しい。キャンプという非日常の中で、9日間という短期間しか関わらないメンバーだからこそ言えることもあるのだろう。しかし、この道のりでこのメンバーで、お互いにさらけ出し、受け止め合ったありのままの自分がいたという事実は、今後の日常生活への自信につながるし、迷ったときに立ち戻る原点の1つになるはずである。

男子1班：6:45 出発→9:52 作業小屋→14:42 十種ヶ峰山頂着→18:30 方丈原テン場着

目標の7:00より15分早い6:45 出発。十種ヶ峰ピークアタックを8人全員で達成するんだという意気込みが感じられるスタートとなった。作業小屋まで進んだところで、メンバーの一人がザックの重さから進めなくなる。一旦、ザックを置いて後から取りに来ようということになり、先に進み始める。しかし、その行動がより自分たちを苦しくすることをイントラが伝え、荷物の所まで戻る。せっかくここまで進んできたのだから、残りの道のりを励まし合って乗り越える決意を胸に、再度ピークアタックへ。14:42 登頂成功。何とか天気もち、果てしなく広がる景色が8人を迎えた。方丈原までの道のりも、幾度となく止まり、時間はかかったが、みんなでゴール。3日目、4日目と7人で進んでいた班の様子から考えると、見違えるほどにたくましく成長したチームの姿が見られた1日だった。

男子2班：7:15 出発→9:52 作業小屋→13:15 十種ヶ峰山頂着→15:10 方丈原テン場着

目標の7:30より15分早い7:15 出発。県境を通過して、作業小屋までチームの誰もが自分たちのチャレンジをしたと思えるいい歩きだった。その後、足の痛みを訴えた仲間を先頭にするなど、チームでまとまって歩くことを意識しながら、山頂へ。林道が終わってからの最後の稜線の苦しい道のりも、声をかけ合って気持ちを盛り上げようとしていた。ついに山頂。9人全員が晴れ晴れとした誇らしい顔つきで登ってきた。

ミーティングでは、「他のメンバーに頼られていることを感じつつ、ナビだったということもあり、必要以上に引っ張ってしまった。みんなで安全をつくるということが甘かった」という意見が出たそうである。自分の役割を精一杯果たす中で、チーム全体のためにどう行動するべきか振り返っている姿勢に驚きを覚えた。



8日目「装備のクリーンアップ・ラストナイトミーティング」

期 日：平成29年8月23日（水）

場 所：方丈原～十種ヶ峰青少年自然の家キャンプ場 泊

テーマ：決意の日（達成感と自信）

【活動の様子】

8日目の朝を迎えた。この日も天候は晴れ。

各班、続々とキャンプ場に戻り、これまでのチャレンジを支えてきた装備のクリーンアップを始める。今まで、多くの参加者のチャレンジを支えてきた装備に、『ありがとう』の気持ちを込めて、丁寧に洗ったり、干して乾かしたりして、また来年の参加者へと受け継がれていくのである。途中、8日ぶりとなる入浴もした。なかなか石けんが泡立たないほどに苦労や汗のつまった身や心を、温かいお湯でさっぱりとリフレッシュすることができた。夕食は、ウナギ付きチラシ寿司でのラストナイトディナーとなった。みんなでご飯を炊いて食事を作るのもこれが最後である。

そして、ラストナイトミーティング。このキャンプで生活を共にした仲間との最後の夜である。このキャンプでどんなことを感じたか、考えたかをじっくりと振り返る時間となる。初日から今日までの軌跡をたどり、自分の目標の達成度や、グループと自分自身の成長を確認し、仲間や自分自身のことについてしっかりと語り合う。また、8日間を振り返って、一人ひとりがお互いに「ありがとう」のメッセージを伝えていく。辛いことも一緒に乗り越えてきた仲間から認められることで、8日間の経験が自分の自信へと変わっていく。

グループでの活動から、家に帰ればそれぞれ個人の挑戦がまた始まる。いよいよ明日は旅立ちの日。個人ランが予定されている。現実に向かう出発点となる個人のチャレンジが待っている。

9日目「個人ラン・装備のクリーンアップ・懇談会・閉会式」

期 日：平成29年8月24日（木）

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家キャンプ場

テーマ：新たなる旅立ちの日（自立と奉仕）

【活動の様子】

最終日も、快晴の朝を迎えた。プログラムを振り返ると最初の2日間は雨に降られることもあったが、全体を通して天候に恵まれていた。最後まで今までの子どもたちのチャレンジと新たなる旅立ちを祝福しているような空となった。最終2日間はコンクルーディング・フェーズと呼ばれ、身体的・精神的な挑戦のクライマックスとして個人ランを行う。キャンプ終了後もキャンプの効果が持続するように、個人で体験の内面化を図る目的がある。

いつも通りの5時起床、朝食を済ませるとまずはクリーンアップの仕上げである。点検を受けて、それぞれの物品を倉庫にしまっていく。同時に、感想文を記入したり、バンダナにお互いのメッセージを書き込んだりと、班での残り少ない時間を味わうように過ごしていた。

8時半頃から保護者とインストラクターの面談も行われた。インストラクターは9日間の子どもの様子を具体的な出来事をもとに丁寧に保護者に伝えていく。話をする中で、子どもの成長を前向きに捉えていくことができるのである。日常へと戻る子どもたちを見守る親が、9日間の子どものチャレンジする姿を知っておくということは、大きな意味をもつ。

いよいよ、新たな旅立ちとなる個人ランである。これまではグループで活動をしてきたが、最後は個人での挑戦となる。それぞれが競争ではなく、自分の決めた目標に向かってアップダウンの激しいクロスカントリーコースに挑戦するのである。これからの人生においても、自分で目標を設定し、自分の挑戦を続けてほしい。そんな願いがこめられている。仲間から直接励ましの声を受けることはないが、これまでともに過ごした仲間の存在を感

じながら走ることが、自分の力になる。お互いに頑張る姿が、励みにもなる。

10時半、スタートの時である。0～5を指で示し、合わせて7になったらスタートする。急な下り坂もあれば、延々と続くような上り坂もある。登山道を思わせる急な坂道もある。その一場面一場面がこれまでの道のりであり、これからの人生である。「歩きたい」、「止まりたい」、「休みたい」そんな気持ちになったとき、自分はどんな走りかしたかったのか、自分の目標に向き合って次の一步を踏み出す。こんな心の葛藤が帰ってからの日常生活へのシミュレーションとなり、一人でも頑張れる自信につながっていく。30分～1時間程度で全ての子どもがゴールした。走りきった後に、膝に手をついて肩で息をする姿も見られたが、その表情にはやり遂げたという達成感が滲み出ていた。

個人ランが終わると、ついに閉会式である。みんなで一つの円をつくる。「最も印象に残った学び」というテーマで、一人ひとりが9日間を振り返り、自分の言葉で発表した。仲間について感じたことや考えたこと、本音で話し合う価値、みんなで物事を決めることの重み、自然のすばらしさ、困難なことでも仲間と協力してやり遂げた自信、当たり前前の日常のありがたさなど、9日間で子どもたちの心に深く根付いたものが感じられる感想発表だった。最後に、ウサギとカメの話为例に、人からどう見られているかにこだわるのではなく、自分の決めたゴールに向かって歩いてほしいというメッセージを送り、スタッフ全員で「いってらっしゃい」と子どもたちを見送った。輝く瞳と自信に満ちた表情で、大きな荷物と何物にも代えがたい宝物を抱えて、それぞれの家へともどっていった子どもたち。新たなチャレンジがスタートした。今回獲得した宝物に磨きをかけるのも、新たに宝物を見つけるのも自分自身である。困難なことに出会ったとき、新たな挑戦だと思って、自分で自分の道を選び、チャレンジしてほしいと願っている。自分で選ぶことが、その結果の全てを自分で受け止めることにつながるからである。

来年は、どのような出会いと冒険が待っているのだろうか。今から楽しみである。